半径2M以内で

ミナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
半径２Ｍ以内で

【Ｎコード】
Ｎ９９１９Ｙ

【作者名】
ミナ

【あらすじ】
ありふれた雑貨にまつわる恋の話。お題に沿った読み切り短編集。
お題配付元：ＴｏｙＢｏｘ様（ｈｔｔｐ：／／ｒｉｗａｈａｒｕｋａ．ｗｅｂ．ｆｃ２．ｃｏｍ／）

ブックカバーの裏側

午後９時２０分。
今日はやけにいつもより遅いな、と焦れつつ帰りを待つ。
和食好きなヤツのためにせっかく煮物を作ったというのに、それはもうテーブルの上で冷めてしまっている。
メールでもしてみようか、と一瞬思ったが、そのすぐ一瞬後には既に後悔していた。
なんで私が。恋人でもないくせに。
自嘲気味に笑ったとき、玄関からロックを外す電子音が聞こえ、ドアの開閉の音が続いた。

「おかえり」
啓都（ひろと）は“ただいま”を返さない。
それは今日だけでなく、初めてこの部屋に来て以来、ずっと続いている事象だ。
挨拶の代りにひそやかな、それでいてはっきりとした溜息。
「…なんでまたいるんだよ」
「今日は煮物だよ。好きでしょ？」
答えになっていない答えに、啓都の目がちらりとテーブルに向く。
席に着いてくれるかと、少しばかりの期待はすぐに裏切られた。
「メシ食ってきたし。明日早いから風呂入って寝る。お前はもう帰れ」
「…明日土曜じゃん」
休みの日に早く出かける用事なんてないくせに、と言外ににじませたのに気づいたらしい。
バスルームに向かいかけていた啓都は、軽く顔を顰めて振り返った。
「おい、出戻り。俺はさみしいお前と違って、休みに出かける相手も用事もあるんだよ」

「出戻りって言わないで！」
苛っとしてつい大声を出した私に、啓都は疲れたように溜息をついて、今度こそバスルームへ行ってしまった。

出戻り、という言葉はふさわしすぎて嫌いだ。
一回りも上の人と大学卒業してすぐに結婚。
年上の人に憧れて、舞い上がって、早々に現実に突き落とされた。
派手な女性関係に疲れ果てて、2年で離婚。
結婚式の日に、まじめな顔で“幸せに”と言ってくれた啓都は、戻った私に殊更冷たかった。
周りの人のように形だけの励ましや慰めさえくれず、ただただ、冷たい。

啓都は幼馴染みだ。
実家は間に1軒挟んだ同じ階のマンション。
誕生日は3日違いで、生まれた病院から大学までずっと一緒だった。
家族のような気軽さからしょっちゅう口喧嘩はしたが、それでも啓都は優しかった。
私があんな馬鹿な選択の誤りさえしなければ、多分今でもそのはずだった。
ひどく疲れていた日々に、気づけばいつも思い浮かべていた啓都の優しさは、今はもうない。
それでもどうして啓都の部屋に出入りしているかといえば、幼馴染みの恩恵だ。
啓都の母が、啓都もひとりだし、暇なら時々食事でも作りに行ってやって、と鍵をくれたのだ。
初めて鍵を使った日、啓都は返せと言ったけれど、おばさんにもらったものだ、と言い訳して返さなかった。
今までも、何だかんだと言いながら啓都は私のわがままを聞いてきた。

それが当然という身勝手な習慣が抜けない私は、幼馴染みという藁に縋っている。
案の定、啓都はそれ以上鍵のことは何も言わなかったし、多重ロックのための暗証番号も変えなかった。
勝手に作った料理も、何も言わずに食べていた。昨日までは。

やけに遅い帰り、手つかずの料理、休日のお出かけ。
想像したくない答えが弾き出される確信にも似た予感が、胸をざわつかせる。
「女…？」
思わず自分で言葉にしてしまったその答えに、思いの外衝撃を受けた。
落ち着こうと、部屋を見回す。
私はそれまで、啓都のもの以外何もない、誰の影も見えないこの殺風景な部屋に拠り所を見出していた。
それなのに、今はそうは思えなかった。
啓都に拒絶され、見放されたような、眩暈に似た気分の悪さに襲われる。
最後に目に入ったのは、部屋の片隅に置いてある鍵付きの箱。

何事にも例外はあるものだ。
殺風景なこの部屋の片隅にあるその箱は、啓都のものではないものが入っていると思われる。
物騒にも南京錠までかけられたその箱が、唯一私の知らない誰かの影を知らせる。
こんなときに、そんなものが目に入るなんて。
啓都が完全に私を放り出すという例外が、すぐ目の前に迫っている気がした。
気分が悪い。

私は立ち上がり、テーブルの上の料理をゴミ入れに投げ捨てた。
その惨めな姿が、自分と重なる。
例外は目前なのではなく、もしかしたら既に起こったのかもしれない。
恐ろしい想像に追い立てられるように、まだ続いていたシャワーの水音を背に部屋を出た。

啓都の部屋に行くのは平日の夜だけだ。
啓都が誰かと出かけたはずの土曜日は、啓都の傍の自分でない誰かのことを考えて苛々と過ごし、
日曜日になる頃には、そんな自分自身に呆れて疲れ切っていた。
こんなことになってようやく、自分の中の確かな気持ちに気付くなんて。
開いた口がふさがらないとはこのことだ。

そして月曜日。
沈んだ気持ちのまま、それでも意地のように啓都のマンションへ向かった。
決定的な言葉を聞くまでは、なんて馬鹿馬鹿しい言い訳をする。
心なしか震える手で鍵を差し込み、暗証番号を入力する。
ロックが外れる電子音にほっとしたりして、自分がいよいよ腹立たしい。

部屋は金曜日とほとんど変わっていなかった。
土曜日の誰かの影を見せつけることなく、相変わらず啓都のものだけが広がっている。
変わっていたのは、私が料理を捨てたゴミ入れが空になっていたこと。
そして、例の“例外の箱”がリビングから姿を消していたこと。

捨てたのか、それともどこか別の部屋に移動したのか。
“例外の例外”もあるのだろうか。
好奇心が抑えきれなくなった私は、そろそろと部屋を移動し始める。
啓都が書斎として使っている部屋のドアをそっと開け、中を覗いてみたが、箱は見当たらない。
もう一つの部屋は、ベッドルームだ。
さすがにそこを覗くのは憚られたが、好奇心には敵わない。
恐る恐る覗きみると、ベッドの傍のローテーブルの上に、果たして箱はあった。

箱の蓋は閉じられている。
けれど、付けられていた南京錠は切断され、箱の脇に無造作に放られていた。
蓋を開けようとして手を伸ばしたが、やはりそれは許されないだろうと引き戻す。
“例外の例外”を期待している自分が哀しくもあり、そんな自分を断ち切るようにリビングへ戻ろうとした。
だが慌てたせいで勢い余ってつんのめってしまい、縋ろうと伸びた手の先はその箱。
床に倒れこんでしまった私のすぐ横に、手がぶつかってぐらついた箱が落ちてきた。

ガツッ。
箱の角が床にぶつかり、その衝撃で蓋が外れて中身が床にぶちまけられる。
倒れていた私の手に触れたのは、紙。
小さな長方形、つるつるとした手触りのものが、何枚も。
「…写真？」
起き上がりそれを見れば、小さなころから大学のころまでの、私と啓都の写真だった。

何枚も何枚もあるそれらは、確かにこの大きな箱一杯に詰まっていたと想像は難くない。
「でも、なんで…？」
写真を、わざわざ鍵を付けた箱に入れる必要性はどこにあるのか。
切断された南京錠は、鍵をわざとなくしていたためとも取れる。
そんな必要性が、私との写真になぜあったのか。
写真を箱に戻しながら考えるが、予想さえできない。

そのとき、ビビッドなドット柄が目に飛び込んだ。
写真に相応しくないその色に、私は弾かれたように反応した。
それは、昔はまって、いろいろな本に着けていたブックカバーだ。
そういえば、啓都に貸したまま返ってこなかった本が一冊あったのだった。
本を手にし、タイトルを確かめるようにカバーを外す。
「封印再度…懐かし」
自分の記憶が間違っていなかったことに、小さく笑いが漏れる。
どんな内容だったっけ…とページを捲ろうとした時、扉に隠れたところに黒い点が見えた。
気になってさらにカバーを外すと、明らかになる黒い点の集合。

“君想う　２０ＸＸ．５．４”

「な、に…これ」
それは、間違えるはずもない、何度も目にしたことのある啓都の筆跡だ。
そして日付は、私の散々に終わった結婚の始まりの日だ。
心臓が、いやな音で鼓動する。
本当に、見てはいけないものを見てしまった気分だった。
鍵をかけて“封印”したものと、それが鍵を壊した今持つ意味とは何なのか。

確かな意味を独りでは掴めきれないことも、私を焦らせる。
私はその本を手に握りしめたまま、茫然と空を睨んだ。

真っ暗な世界に、急にオレンジ色の光が差し込み、目が眩む。
それがリビングの照明だと気づいて、私は慌てた。
茫然としていた間に、とっくに陽は暮れ夜の時間になっていたらしい。
啓都が帰ってきたのにも気づかなかった。
立ち上がりかけたところで、啓都が部屋に入ってきてしまった。
「ひ、ひろ…」
「何してる」
不機嫌そうに私を見やった啓都は、私の手にしていたものを見て目を剥いた。
「…お前、見たのか」
「あ、ごめん。わざとじゃ…」
最初は見ようとしていただけに、小さな声になってしまう。
啓都はもう一度ゆっくりと聞いてきた。
「見たのか」
私は、もう声も出せずに小さく頷いた。
その途端、啓都は大きく息を吐き出して床にしゃがみ込んでしまった。
驚いて啓都の傍に行くと、啓都は手で顔を覆ってしまう。
「啓都？」
「見るなよ」
「え？　あ、ごめん…。あの、ぶつかって落ちちゃって、それで…」
言いながら啓都を覗きこむ私の顔に、啓都が手を伸ばす。
「じゃなくて、今俺を見るな、って」
「な、なんで？」
啓都の指先が顔に少しだけ触れて、私は図らずして声が震えた。
掴みきれなかった意味が、鮮明な形になった気がしたからだった。

顔の前に翳された手の指の隙間から見える啓都は、リビングの光の色を差し引いても、赤みがかっている。
「…かっこわりぃ」
くぐもった声でごちた啓都が、それが正解だと告げていた。

いつもの不機嫌そうな冷たい物言いじゃなく、拗ねたような物言い。
昔の優しい啓都の、穏やかな物言い。
それに気づいて、急に涙が出た。
冷たくされた時には出なかったのに、今になって溢れた。

うれしい。うれしい。うれしい。
渇いていた心が、急速に満たされていく。
満たされて、溢れ出して、涙となって零れ出したのだ。
その水滴が、啓都の指に当たり、驚いて顔をあげた啓都と目が合う。
「なに、泣いて…」
「ごめん…」
「何が」
想いに気づかなくて。
幸せに、と言ってくれたのに、応えられなくて。
ずっと甘えてて。
他にも色々ありすぎて、何も言えなかった。
優しい声が嬉しくて、とにかく何か伝えたくて、咄嗟にキスをしていた。
唇と唇が軽く触れ合うだけの、中学生みたいなキス。
それすらも、震えるほどの緊張感。同時に、満足感。
「…すき」
喉が詰まって、掠れた声しか出なかった。
必死に、もう一度同じ言葉をどうにか舌に乗せるけれど、同じ声だった。
苦しくて、もどかしくて、どうにもできないでいた私を受け止める

のは、やっぱり啓都で。
宥めるように首筋をひかれて、背中をあやすように撫でられて、落ち着く。
「俺も、冷たくして悪かった。もうしないから、そんなに泣くなよ」
泣いた理由もわかってしまう辺りが、啓都らしい。
子どもに言うみたいな言い方に思わず笑った私に、優しい視線が注がれていた。

散らばった写真を片づけながら、そっと啓都を窺う。
視線に気づいた啓都が、小さく笑って私を抱き寄せる。
ローテーブルに寄りかかった啓都と向かい合わせの姿勢で、啓都の肩の先で南京錠が目に入った。
封印が破られて、切断された錠。
けれど、今封印したのは、似合わない冷淡さと、散々な過去だ。
破られない錠のある場所に、永久に。

ブックカバーの裏側（後書き）

ちなみに。
土曜日出かけたのは、単なる休日出勤でした。
見栄張っちゃった啓都は、お風呂を出て捨てられた料理を見て我に返る、と。
啓都サイドではそんな感じの動きがあったのでした。
ストーリーに生かせない力不足をひしひしと感じます…。

“封印再度”は実際にある小説ですが、中身とは関係ありません。
単に“封印”という言葉をかけさせてみたかったのです。それだけです。

マウスを握る手

「ひよこ、これやり直し」
そろそろ帰ろうかな、と思っていた時に無情な声。
しかもまた“ひよこ”呼ばわり。
恨めしげに目線を右へ移すと、ひらひらとレポートが振られている。
「室長。名前、ひよりですから。ていうか、安西（あんざい）です！」
「これくらいのレポートも一発で通らないようじゃ、ひよこで十分。
この検証、結局どの年代層に一番効果的かあいまいなままだぞ。
書き方工夫しろ」
さくっと流され、痛い言葉と一緒にレポートを突き返されてしまう。
何を言っても暖簾に腕押し、こっそり溜息をつきながら戻ろうとすると、「明日までな」と追い打ちをかけられる。
これで今晩は残業が確定だ。

室長は、私と大して年が離れていないのに、私が入社した時は既に主任だった。
入社したすぐ後の直属の上司で、会ってすぐ私の名前を捩って“ひよこ”と命名するようなふざけた人なのに、
独特の手法で的確に顧客のニーズを割り出すことが上層部に評価され、
それから2年、まさに飛ぶ鳥を落とす勢いでこの販売企画室の室長にまで昇進してしまった。
それに対して私はといえば、実際3年目なのに名前のせいとだけは言い切れない“ひよこ”状態。
着眼点が面白い、なんて言って室長は人選権を持つ今も相変わらず私を直属の部下に置いてくれているが、
見合う仕事ができているのかいないのか、自信はない。

コンピュータと睨み合いを続けているうちに、どんどんと他の社員が帰っていく。
あっという間に午後8時を回り、気づけば私と室長だけが部屋に残っていた。
しんとした中に、コンピュータのファンの音と、キーボードをたたく音、マウスのクリック音が響く。
工夫しろと言われた書き方に悩み、途中で行き詰った私は、ちらりと室長を窺う。
視線を上げないまま見ると、まず最初に目に入るのは左手。
左利きの室長は、左手でマウスを握る。
小さく手首を返し、ボタンとホイールの上をときどき指が滑る。
その手に、相変わらずどきりとさせられるのだ。
掌が大きく、指が長くてしなやかな、その手は男性の割には線が細い。

その手で、どんな風に触れるのだろう。
その手で触れられたら、どんなだろう。
そんなことを思わず想像せずにはいられない。
いつからそんな風に見るようになったのか、もうわからなくなっていた。
好き、なのだと思う。
見るたびにこんな妄想めいたことを想像してしまうくらいに。
室長には、浮いた話はなく、役員たちにしょっちゅう呼び出されては見合いさせられるも、
いつもそつなくこなし、そしてさりげなく断られるように仕向けているらしい、というのが専らの噂だ。
実はゲイなんじゃないか、なんていう恐ろしげな噂まで密かに出回っている。
まさかね、と思ったところで、急に室長が立ち上がった。

不意打ちにびくり、と体が震え、顔をあげてしまうと、室長の訝しげな視線とぶつかってしまう。
「なに」
「や、何でも、ないです」
壊れたロボットのような返答に内心冷や汗をかいたが、室長は何も言わずに部屋から出て行った。
荷物を持たないで行ったところを見ると、まだ帰りはしないらしい。
室長の姿が見えなくなったところで、詰めていた息を一気に吐き出した。
「びっくり、した…」
まさか、見ていたことに気付いただろうか。
仮に気づいていても、頭の中で想像していたことまでは気づかれないだろう、とひとまず安心する。
そしてちっとも進んでいないレポートに視線を戻し、慌てて頭を仕事モードに切り替えた。

ディスプレイの前に、突然紙袋が差し出される。
ビルの向かい側にある、ファストフード店のマークが見えた。
「腹減ってると効率下がるだろ。こんなもんで悪いけど」
今出かけたのは、食料調達をしに行ってくれていたらしい。
残業のときは自分も最後まで残って絶対にひとりにしないこととか、食事をさせてくれるところとか、
こういうさりげなく優しいところに、だんだん絆されたんだろうか、私は。
感謝の言葉を口にしながら、室長から紙袋を受け取る。
その際に目に入った室長の指先に、またもやどきりとさせられて慌てた。
自分の席に戻るのかと思った室長は、私の左隣のデスクに自分の分の食べ物を広げ始めた。
その様子に少しだけ驚いて見つめていると、室長が目線をこちらに

寄こす。
「…戻ったほうがいい？」
「え？」
「ひよこが嫌なら、自分の席で食べるけど？」
「嫌じゃないです」
思わず即答してしまって頭を抱えたい気分になったが、いまさら撤回もできない。
「なら、ひよこも早く開けて食えば」
私の動揺なんて気にも留めていない言い方に、そうですね、と小さく呟きながら紙袋を開ける。

どうせ私は、“ひよこ”なのだ。
優しくしてくれても、それはそれ。
私の持つ感情とは全く次元の違う、“親鳥”の気持ちに違いない。
ファストフードのハンバーガーですらキレイに食べる、その指先に視線を奪われながら、ちょっと落ち込む。
考え込んで食べるスピードの鈍った私をよそに、室長は隣で手早く食事を済ませていく。
そして私が半分も食べないうちに、後片付けまで終わらせてしまった。
私の様子をちらりと見た室長に気づき、さきほどこんなので悪いけどと言われたことを思い出した。
あまり進んでいないから気を遣わせたかもしれない、と焦って少し多めに口に入れた途端、咽てしまった。
「っごほ、けほっ」
「おいおい、無理すんなよ。大丈夫か？」
慌てた室長が、飲み物を差し出して、背中を軽く叩いてくれる。
その手が触れた瞬間、背中にぴりりと何かが走った気がして、ストローを咥えたまま室長を見上げてしまった。
視線に気づいた室長は、何とも言えない表情を浮かべて手を離した。

離さなくてもよかったのに…とは、もちろん言えなかった。
微妙な空気のまま、私はもそもそと残りのバーガーを食べる。
その間、室長はそのまま隣のデスクにいた。
ようやく食べ終わって、ペーパーナプキンを取り出そうとしたとき、
室長がこちらを向いた。
「なぁ、ひよこはさ。いっつも見てるよな、俺のこと」
一瞬、何を言われているのかわからず、中途半端な姿勢で固まってしまった。
ぎしぎしという音が聞こえそうな、ゆっくりとした速度で首を左に回す。
「違った。俺じゃなくて、俺の手か」
「え…？」
意味のない音しか、出てこない。
気づかれていた、その衝撃が静かに全身に広がっていく。
動けない私の顔を見て、室長はふわりと笑った。
そしてそのまま、左手を伸ばしてきた。
その親指の先が触れたのは、私の唇の左端。
「ケチャップ、付いてた」
指に掬われたそれは、そのまま室長の口元に運ばれる。
恥ずかしい。
さっき背中に触れられたのとは違う、明らかに意図的な接触に戸惑う。
でもそれ以上に、触れられた一か所からじわじわと襲う甘い痺れに、
居ても立ってもいられなくなる。
どうしよう、どうしよう。
もうここから逃げ出してしまいたい。
ついに腰を上げようとした私の、今度は両腕が掴まれて引き戻される。

「あ…」
「逃げるなよ」
両方の二の腕から、また新しい感覚が這い出す。
その感覚から逃げるようにギュッと目を瞑るけれど、逆に感覚が研ぎ澄まされたようで居たたまれない。
慌てて目を開けば、今度は目の前に室長がいて、別の意味で慌ててしまう。
「なぁ、俺の手はさ、普通の手だよ。それでもひよこがこんな風になるのは、どうしてなの」
「ど、ういう…意味ですか」
「…俺の手を見てる時、自分がどんな顔してるかわかってる？　それにさっきから俺が触るたび、どんな顔してるか気づいてる？」
わかっているから、だから逃げ出したいのだ。
室長もそれをわかっていて、それでもそうやって聞き出そうとする理由は何？
「もう、離してください…」
「どうして」
「室長は、わかってるじゃないですか！　なのに、ひどいです。私のことなんか何とも思ってないんだから、面白がらないで、放っておいてください」
手は緩まない。
外してほしくて、体を捩ろうとするけど、びくともしない。
そのかわり、笑いを含んだ溜息が落ちてきた。
「強情だな。俺が何とも思ってないって、なんで決めつける？」
「え？」
「ほんっと“ひよこ”だよなぁ。普通何とも思ってない子のこと会社で渾名で呼んだりしないし、
残業の時わざわざ一緒に残ろうとか、隣でメシ食いたいとか、絶対思わないと思うんだけど」
「え、あれ？　残業って、私のときだけですか、最後まで一緒に残

ってくれてたのって…」
「…気づいてなかったのかよ。あれだけ俺のこと見てたのに、ほんとに手ばっかり見てたんだな」
ひどい言われように思わず口を尖らすと、そこにちゅっと軽く唇が触れて、驚いて仰け反る。
室長の顔は、もう面白くて仕方がない、っていう雰囲気がありありと浮かんでいて、ちょっとむかつく。

あぁ、それにしても、いつから私の視線に気づいていたのだろう。素直にその疑問をぶつけてみると、室長は少しだけ苦笑した。
「最初から。というより、そもそも俺が見てたんだよ」
「は？　なんですか、それ」
「だからさ。俺のほうが先に好きになってたってことでしょ。
そしたらいつ頃からか逆に視線感じるようになって、最初は半信半疑だったけど当確っぽかったから。
あーあ、言わせてみたかったんだけどな。結局俺が言わされたか…」
いつ頃からか、って言うけれど、私が室長をつい見てしまうようになったのは、もうずいぶん前からだ。
ということは、それよりもはるかに前から室長が私を見ていたということになる。
そういえば、残業をし出してから一度もひとりきりになったことはなかった。
「…信じられない」
「ははっ、でも本当だし」
「だって、実はゲイじゃないか、とか噂されてたりしてましたし」
「はぁ？　それ信じてたのか」
「え、いや…その、まさか、とは思ってましたけど」
根も葉もない噂に大げさな溜息をつく室長を見ながら、だんだんと驚きが落ち着いてくると、今度は嬉しさがこみ上げて来る。

しかも、これからは堂々と見てもべつに咎められたり焦ったりする必要が無いんだと気づいて顔が緩んだ。
「お前、今なんかよからぬこと考えてないか」
「えっ？」
「どうせ、今度から見放題とか思ってたんだろ。妄想だだ漏れ」
ほとんど当たっている言葉に、ぎくりとして室長を見上げる。
室長は擬態語で言うとまさに“にやり”という顔をして、私の腕を掴んでいた手を微妙に動かした。
撫でられるような感覚に、落ち着いていたはずの甘い痺れがまた這い出す。
「あ…」
「やっぱり、いいなぁその顔。まあ、今度から俺も触り放題ってことで、おあいこだな」
おあいこ、って。
私が見るのとじゃ、全然レベルが違うんですけど。
相変わらず触られたままで、ぞくぞくする感覚に耐えている私は、口を噤んだまま心の中で抗議するが、聞こえるはずなんてない。
「バカな噂も、嘘だって思い知らせてやるよ。そのうち」
不穏でアヤシげな言葉に、さらにぞくりとさせられる。
室長は立ち上がると、私の肩をぽんっと叩いて、ついでに耳たぶを軽く抓んでから自分のデスクに戻っていく。
「とりあえず、レポートが先ね」
私は、耳を押さえてデスクに突っ伏してしまった。
室長は絶対ドＳだ。
こんなんじゃ、仕事なんてできやしない。
室長の小さな笑い声が聞こえて、なんでこの人を好きになってしまったのだろうと本気で考えてしまった。

マウスを握る手（後書き）

オフィスラブです。
とある残業日のシーンでした。
ステキな上司がいるって、いいですね…（遠い目）。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9919y/

半径2M以内で

2011年11月29日23時50分発行